

吉満 義彦と徳之島

徳之島町教育委員 寶田 辰巳

手元に一葉の複写写真（右写真）がある。東京帝国大学の制服制帽に身を包み、左手に白い表紙の分厚い本を握って土手のようなところに座っている吉満義彦の写真である。丸渕の眼鏡の奥に光る眼差しはストイックな憂いを帯びた双眸に強烈な意志の力がみなぎりしっかりと前方を見据えている。写真の裏には太字の万年筆で「母上様 義彦 学帽の名残り 一九二八年一月中旬 大学池の端にて」と、流れるような筆致の達筆の添え書きがある。まさしく吉満義彦の自筆である。この写真をお見せした時、その二人の若き学者は敏感に反応された。「コピーをとらせていただいてもいいですか」と。



平成 22 年 5 月、私は思いがけない方々と面会する機会を得た。一人は若松英輔氏。「慶応義塾大学出版会」で精力的に執筆活動を展開し、天才的言語学者であり且つイスラム哲学思想史の日本最高の権威といわれる哲学者「井筒俊彦」を専門的に研究しておられる評論家である。もう一人は、山本芳久氏。東京大学准教授で、西欧思想史なかんずく、中世思想史がご専門の方と伺った気がする。ご両人とも少壮気鋭の研究者であり、前述の吉満義彦の写真のコピーを所望されたのがこのお二人である。両氏はそれぞれの研究活動の途次、「吉満義彦」に出会いその生誕地徳之島を訪れたものであった。紹介頂いた方が母間教会の池上神父さんであったことから、面会は母間教会で行われた。

若松氏の語り口は熱っぽく昼食時間を挟んで数時間の語り合いとなった。

若松氏は直ちに具体的提案を行われた。この徳之島の地で吉満義彦についてのシンポジウムを行いたい。テーマは「没後 65 周年 吉満義彦の思想とその継承—徳之島・信仰・哲学」とし、期日は平成 22 年 12 月 17—18（金・土）、講演者は 5 名とし、講演者と演題はそれぞれ、若松氏が「吉満義彦と小林秀雄—文学者との関係」、山本氏が「吉満義彦のトマス・アクイナス研究」、私には「吉満義彦と徳之島」として欲しい、後の 2 名の講演者も 5 月月内には決定できる、とのことであった。私は直ちに徳之島町教育委員会社会教育課と連絡を取り、会場

を押さえてもらった。思えば、平成 22 年（2010 年）は吉満義彦没後 65 周年にあたったのだ。

結果からいえば、このシンポジウムは実現しなかった。あと 2 名の講演者がどうしても決まらなかった。若松氏は平成 22 年の 11 月、「今年は万止む無く延期としますが、あらためて必ず実現させます」との趣旨の強い決意のメールを下された。

平成 21 年 5 月 19 日、私は徳之島高校主催の「生涯学習県民大学講座」で、吉満義彦について約 2 時間話をさせて頂いた。演題は「吉満義彦の生涯とその思想（「近代の超克」をめぐって）」。

この講演で私は吉満義彦の生涯と、近代文明批評家としての側面を主に語った。

吉満義彦は「孤高」の宗教哲学者、とよく評される。何ゆえに「孤高」の形容詞がつくのだろうか。若松英輔氏も吉満義彦を「日本における最初のキリスト教哲学者。今も彼を凌駕することは容易ではない。」と書いておられる。

実は、若松氏が私に講演の演題を「吉満義彦と徳之島」とするよう指定されたのには理由があった。氏は次のような趣旨のことを言われたのである。「自分は新潟の出身である。だから新潟出身者のことについてはよく分かる。しかし同じ新潟県でありながらお隣の佐渡については分からない。佐渡の人々も同じように、佐渡のことは佐渡の人間にしか分からない、と言っている。これは本当である。」

要するに、氏は私に吉満義彦について徳之島の人間にしか語り得ないところを語って欲しいと示唆されたのである。以来、私は改めて「吉満義彦」が生まれ落ちた徳之島という島の歴史、自然、風土、島民性といった、生命地盤について考えてきた。

吉満義彦の「真理探究」への旅路は旧制中学（鹿児島一中）の低学年から「憑かれた」ように始まった。後に彼が「わがホルテンシウス体験」と呼んだ白昼の悪夢がきっかけである。夢の中で彼は「大きな注射器のごとき」ものを手にした「魔の巨人」に追いかけられ、遂に、頭から脳髄を全て吸い取られたのである。自他共に許す飛びぬけた「いちばんでいき」（秀才を意味する方言）の彼にとって最大限に大切な脳髄を吸い取られたショックは大変なものであった。以後彼は、「頭脳他に何人にも奪われ得ぬものを不動に確保せねばならぬと考え始め」、それが「真理」であることを知り、俗的野望を一切捨て去りひたすら「真理の探究」へとひた走る。彼を夢の中で追いかけた「魔の巨人」の正体は何であったか。

また何故彼はかかる夢をみたのか。そのとき、彼はまだキリスト教の洗礼は受けていない。

鹿兒島一中をずば抜けた成績で卒業し、いささかも迷うことなく一高文科丙類（仏語）を受験して合格する。文科丙類を迷わず選んだという事実は極めて重要である。因みに当時のナンバースクール（一高から八高までであった）で文科丙類を設置していたのは一高と三高のみであった。甲類（英語）でもなく乙類（独語）でもなく丙類（仏語）を選択したということは、中学生にしてすでに形而上学におけるフランスの優位性を自分自身の判断において直感していたということになるからである。そして1928年東京帝大倫理学科を卒業と同時に直ちにフランスに留学、カトリック神学者、ジャック・マリタン教授に師事する。一高、東大、フランス留学と、彼は主に西欧精神史の研究と思索に明け暮れた。

吉満義彦が研究考察の対象として渉猟した東西の哲学者・神学者・思想家・文学者・詩人等は夥しい数にのぼるが、パスカル、キルケゴール、ニーチェ、ドストエフスキー、リルケといった人々に深い心情的共感をよせた。吉満義彦にとって、思想家とは己の思想を「生きて」はじめて思想家であった。キルケゴールやニーチェは己の魂の奥底において、絶叫し、血を吐くような思索的苦闘を続けつつ己の思想に生ききった実存的思想家であった。キルケゴールは「死に至る病」において絶望の深淵の幾層を極め、ニーチェは「神は死んだ」と宣言し、果てしなきニヒリズムを「超人」の意志をもって強引に克服しようとアフォリズムの名品を書き上げていくが、彼を取り巻く外的状況は無理解や中傷に満ち、遂には睡眠剤や鎮静剤の多用により、精神の崩壊を来たして発狂した。

吉満義彦は「教授」という肩書きを持っていたが恐らく字義的な意味での「教授」の意識はなかったであろう。彼の著述は晦渋を極め、一部の評者（例えば田中耕太郎）には、「ペダンティック」とさえ評された。小林秀雄にも「吉満君の論文は非常にむずかしい。極端にいふと、日本人の言葉としての肉感を持っていない」といわれたが、吉満は「書いて居る時には思想の必然性といふか、真理性ばかりに一生懸命になる。（中略）兎に角一生懸命である。それで正直なことを言へば、分かり易く書かれた哲学者の物があるが、それは一寸厭である。なぜかといへば高みから人を教へるやうで……。分からせるといふ努力は墮落だと思ふ。」と、応えている。（「近代の超克」より）。吉満義彦にとっては教壇の上で講義を行うという行為自体も己の思想を「生きる」生活の一部だったのであろう。

彼の大学における講義も、著述と同じくその質的レベルを落とすことはなかった。

「哲学者」と題するホイヴェルス神父の短いエッセイがある。ホイヴェルス神父とは吉満義彦が、亡くなる1年前の1944年7月、「わが祈り」と題したドイツ語の詩を捧げたあの神父である。「哲学者」とは勿論吉満義彦を指す。

ある日（年月日は不詳）、11人の学生と二人の学者併せて13人が都会のはずれに住む「哲学者」の家を訪ねていく。入り口のところまで来ると、突然若い学生たちが大笑いする。門のところに「防犯当番」と太字で書いてあったからである。彼らには日ごろから抱いていた「哲学者」のイメージと「防犯当番」との間の落差が余りに大きく思わず爆笑したのであろう。迎えに出たのは若い妹さんだった、とあるのは、その生涯を兄の義彦に捧げつくして36歳の短い生涯を閉じたあの栄子さんだろう。栄子さんはたまたま近くに外出していた兄の義彦を呼びに行く。その間、13人の訪問者は「哲学者」の書斎に入って待つことになるが、その書斎には山のように書籍が積み上げられ、「さながらトーチカのように」あった。壁には、若くして逝いた夫人の写真がこの書物の罫を見下ろしていた。夫人とは勿論1933年2月に結婚し5月に22歳の若さで逝いた輝子夫人である。

（私はたまたまご親族の方から結婚写真を見せて頂いたことがあるが花嫁の輝子さんは高島田に白い角隠し、振袖の純和風姿、花婿の義彦氏はモーニング姿で、ご兩人とも清らかで美しい立ち姿であった。この後わずか3ヶ月で他界される輝子さんの姿とはとても信じられない、神秘的な写真だった。しかし、真実は、このときすでに輝子さんは脊椎カリエスという不治の病に侵され、起居は極度に不自由となっており、病床からギブスをつけて高円寺教会へ来られ、辛うじて立っている姿であった。）

さて、そうこうするうちに「哲学者」が快活に帰ってきて、妹に茶菓子と家中にあるだけのコップや茶碗を集めて出すように言いつける。そして「哲学者」の話が始まることになるが、リルケの話から始まり、ことごとく形而上的な話が続く。それも常に高揚した精神を維持したままの状態においてなのである。妹さんは茶菓を13人の前に供するが、彼女は形而上的な話に終始する「哲学者」の耳になにやら一言ささやく。すると「驚（哲学者）は高い蒼空からこの私たちの世の中におりてきて私たちをもてなした」。

簡素で求道的な吉満義彦の日常の一端を彷彿させるエッセイである。小林秀雄は吉満義彦を「学生時代から聖者であった」と評したといわれる。小林秀雄は吉満より二歳年長であるが1928年の同じ年に東大仏文科を卒業している。

吉満義彦の「孤高性」をイメージさせるものに彼の「靈性優位の神秘思想」がある

吉満義彦はフランスへ留学したとき、汽船ではなく満州からシベリア鉄道で当時のソ連を横断しポーランド、ドイツのベルリンを経てパリに着いている。そしてムードンの町のペンションに落ち着いたところで一高、東大時代を通じて「靈的師父として心から敬愛していた」岩下壯一神父あてに一通の手紙をしたためている。この手紙はそれを読む者にとって、ほっとさせる一面と同時にやはり「感動するところが違うな」という印象を強く与える。生まれて初めて目にする外国の風景は普通の若者に与えるそれと同じようなあのわくわくするみずみずしい感動を青年吉満義彦にも与える。ただ、意外、と思わせるのは、6年間学んで親しんできたはずのフランス語が「不自由」なので「これから九月までは言葉に慣れる様に努力しようと思っています」と書かれてあることである。しかし、実はこの経験は外国語を日本で学んだ者が初めて外国へ出てする経験と一般である。一方、彼の胸を強く打ったのは、パリの美しい街並みやセーヌの流れなどではなく、「ノートルダム（寺院）に祈る群れ、ミシオンエトランジェールの黒衣の青年達」の姿である。これらの風景に接してはじめて、「やっとカトリックに安心したように感じた」とあり、続けて、「私の唯一の望み、靈の再発見は神父様の御愛顧によって、漸くここに約束せられた様に思いました」と書いている。

この手紙に見る限り、吉満義彦のフランス留学の目的は、日本で岩下壯一神父の教え、感化を十二分に受けたカトリックにおける「靈性の優位」を再確信することにあつたことが読み取れる。

この手紙は、吉満義彦の最も深い理解者のひとりデュモリン神父によって岩下壯一神父の遺品の中から発見された。

デュモリン神父はこの手紙にある *primaute du spiritual* という語に特別に感動する。フランス語で「靈性の優位」という意味である。神父の吉満義彦についての思い出を綴った文をそのまま引用する。「この言葉（靈性の優位）が彼の口をついて出るのを幾度聞いたことだろう。これは吉満先生の大好きな言葉の一つであつた。先生は自分でもこれを祈りながら味わつただろう。生活の上にそれを実践したのであつた。（中略）この言葉こそ彼の思想を貫いていたものであつた」。

吉満義彦は命の奥底に靈的感性を豊かに沈潜させていた形而上学的思惟者であると同時に、祈りによってそれを湧出させる信仰の冷厳な実践者であつたので

ある。

ただ、「靈性の優位」、「神秘思想」といった述語の前には、私はたじろがざるを得ない。

私は「カトリック信仰」の内側にいる人間ではない。そして、靈的感性もなければ、神秘的体験も持ち合わせていない。形而上学的な思惟を極限まで深耕させて行けば、果たして「靈性」や「神秘思想」を生命の奥底で感得できるものなのかも、私は知らない。

吉満義彦も「神秘主義」という述語を使用するのには、極めて慎重であり、厳密な定義はない、という意味のことを述べ、自らも、M y s t i k (ミスティク)という原語をしばしば用いている。

しかし、彼は「神秘主義の形而上学」において、インド的宗教思想やアラビア的回教思想地盤における固有の宗教的神秘体験現象について、自らに専門的研究を語る資格はないとしつつも、キリスト教神秘思想との対比において濃厚且つ晦渋な論考を行った後、スペインの神秘家「十字架の聖ヨハネ」の神秘体験に基づく、教会における段階を追った深い神秘観想が、「来世における靈的至福直感に類比される靈魂体験を得しめられる」、と述べて明らかにカトリックにおける靈性の「優位」を確信的に主張するが、もとより「外側」にいる私にそれを解する力もまた語る資格もないだろう。しかしながら、吉満義彦が「靈性」を解し、「神秘主義」を語るその「靈的感性」と「神秘性」の拠って来る源は何なのか、更に又、真理を求めてのあの勉学の、英雄的ともいえる凄まじさ、猛烈さがいかなる生命的地盤から来るのか、を考察することは、我々、徳之島に生まれ育った人間として許されるかも知れない。

ここで、中山朋之氏について是非とも言及しなければならない。

中山氏は福岡市のご出身の詩人であり徳之島高校に社会科教諭として在職された後、南日本新聞社の徳之島支局員として引き続き在島されたと伺った。現在は鹿児島市にお住まいである。

徳之島に在住しつつ吉満義彦研究に抑えがたい情熱を注がれ、詳細な資料発掘作業を研究者としての基本的動作として、貴重な研究成果を残された人は中山朋之氏をもって嚆矢とする。氏の研究成果は「詩人哲学者・吉満義彦への断章」という題名で、水野修氏が主催する「潮風」に七回に亘って連載された。

徳之島町制施行 50 周年記念事業の一環として行われた吉満義志信・義彦氏胸

像除幕式において、私は両氏の略歴紹介を約一時間に亘りさせて頂いたが、その際、中山氏の研究成果を十二分に活用させて頂いたことを、ここに告白する。

氏は、かの著名な郷土史家、前田長英氏のお宅で初めて「吉満義彦全集」第一巻を手にとり、「その内実のものすごさを実感」した。爾後、憑かれたように、吉満義彦研究に突っ走る。中山氏は、まず、吉満義彦の父、吉満義志信の研究から始める。そして、時系列的にまず義志信の誕生から逝去にいたるまでの履歴、職歴、事跡などを明確にしていく。これにより、複雑な吉満家の家系が次第に明瞭となる。中山氏の追及の究極の目的は、何が吉満義彦を「吉満義彦」たらしめたのか、である。氏は、この追及の第一歩を吉満家の家族周りからはじめたのである。そして、当時亀津の安住寺（現NTTの在る所）のあとにできた「日本メソジスト南島宣教部・徳之島亀津（教会）講義所」と吉満義彦夫妻との「深い関わり」に着目する。様々な、言わば、状況証拠を積み上げた後、1919年、大正8年、吉満義彦が中学2年のとき（15歳）、吉満義彦は此処において受洗した、と結論付けている。そして、中山朋之氏はこの「受洗」を吉満義彦の実存的な生き方の出発点として位置付け、併せて、吉満家の家族愛に包まれたいかにも徳之島の連帯的環境が信仰面での人間性の深化を助成したのではないかと推論している。

中山氏の研究態度は実にエネルギーであり、青山信さん（義彦の異母末妹）との交信を含め、可能なあらゆる関係者へのインタビュー、資料の渉猟を行っておられるが、「潮風」に七回の「断章」の連載後、吉満義彦に関する筆を置かれている。ある機会に、私が「どうして研究をお続けにならなかったのですか」と問うたところ、「神秘主義ですよ」、と一言、答えられた。つまり、吉満義彦の「神秘主義」は、中山氏の前にも大きな壁となって立ちはだかったのである。

さて、話は、もとに戻る。吉満義彦の「靈的感性」と「神秘性」、それにあの英雄的勉学の猛烈さの拠って来る淵源である。

重複するが、吉満義彦がみたあの不思議な「白昼の悪夢」。彼は夢の中で、「大きな注射器」のようなもので「魔の巨人」によって頭から脳髄を全て吸い取られた。人は、その人にとって最も大切なものを失う恐怖を、悪夢の中にみる。

義彦少年にとって、自他共にその素晴らしさを認めた脳髄は、命と同じ位に大切なものであった。それを奪われた衝撃は、夢から覚めてなお、否、覚めて正気に考えれば考えるほど、大きくなった。そして、「頭脳他に何人にも奪われ得ぬものを不動に確保せねばならぬと考え始めて」、それが「真理」であると知り、

「真理の探究」へとひた走る。これが吉満義彦の実存的生への出発点であったことは間違いない。しかし、どんなに勉強しても十五歳の少年がそう簡単に「真理」に到達できるわけがない。「真理」への激しい憧憬と、求めて得られぬ煩悶の中、義彦少年が苦しさのあまり、信仰世界(身近にあったキリスト教プロテスタント)へと入っていったことは容易に想像できる。信仰の世界に入ってから苦悶は続くがそのことの理由は今は論じない。

悪夢の中身を考えてみる。話はいささかアミにズムの世界に入る。

徳之島に伝わる「マブイ」(または、「マブリ」)の話。

私は、少年のころ、「マブイ」の話をされるのが最も怖かった。何しろ自分の目では見たことがない。ハブはまだいい。目で確かめているから怖さの限度が測定できている。しかし「マブイ」はおおよそ得体の知れない未知の恐怖感を与える。カンテラが照明器具の役割を果たしていた時代、夜の漆黒の闇は少年にとって底知れぬ恐怖であった。「マブイ」は「生きた霊魂」であり、これが身体から分離して去ると生命の終焉を表していると言われた。そして、「マブイ」は夕刻から夜分にかけて見ることができ、それをよく見る人と全く見ない人がいた。特に子供の「マブイ」はしっかり定着していないと考えられ、葬式の三日目のシキヤッタ^{*}を捨てる日は、子供のイキマブイが食べることはないようにその晩は子供に腹いっぱい食べさせた。それを子供が食べたりすると、子供の「マブイ」は死者に引き寄せられて死んでしまうからである。少し長くなるが、以下、川野誠治氏の「徳之島民俗語彙誌」(徳之島郷土研究会報 第30号)より「マブイ」の項を一部抜粋して引用する。

「霊魂のことをマブイと呼ぶが、このマブイは生きている人間の肉体を離れてさまよい歩くことがあって、人々を心配させた。マブイがさまようのは、普通の場合病人であるが、長期間にわたって病床に伏している者がいたら、シマ(集落)中でマブイのことがとりざたされ、マブイの話題はその家に向けられる。そのマブイが墓の方へ行くようになると、もう死期が近いという。またマブイは健康な肉体からも抜け出すことがある。すると夢遊病者のようになるので、人々は大変恐れた。(中略) マブイが抜けているかどうかはユタによって占われる。占いはユタが茶碗に水を入れてその上を白紙で覆い、糸で縛ってから呪文を唱える。それはトーグラ(炊事場)の表入口と上ン屋(母屋)の表入口で行われる。しばらくして白紙を開けて見て茶碗の中に砂粒が入っておれば、その人のマブイはすでに墓に行っているのも助からないが、砂以外の小粒のごみであれば心配はなかったという。不思議に砂の入っている時もあったという。」

マブイについての、川野氏の説明はまだまだ続くが、それは極めて具体的であり、リアリスティックである。

吉満義彦の「白昼の悪夢」を読んだとき、反射的に私はこの「マブイ」を連想した。そして、直感的に、吉満義彦はこの「マブイ」を見たか、あるいは、この話をさんざん聞かされて育ったに違いないと確信した。義彦少年が頭から吸い取られた脳髄は、義彦少年の「イキマブイ」であった。このことは、義彦少年の深層意識の問題であり本人が意識の表層で認識したか否かは関係がない。頭脳が明晰で、島で言う「いちばんでいき」の少年であればあるほど、自分の理性的既知の範囲外にある未知の事象に対する畏れ、または、恐怖は大きい。

故加川徹夫氏の写真集「島史」（しまぶみ）を開いてみる。

私はこの写真集ほど徳之島の「徳之島らしさ」を表現した著作物を知らない。この写真集は徳之島の全てを語り尽くしている。写真集の一葉一葉が精選された珠玉の写真であるが、中でも「トゥール墓」（風葬跡）を写した数葉の写真はまさに霊的空間を激写した「凄惨な傑作」である。プロの写真家とはいえ、加川氏は恐らく心の中で手を合わせながらこれらの対象（無秩序に並べられた頭骸骨、散乱した人骨や甕など）に向かってシャッターを切ったことだろう。昭和 53 年の撮影とあるが盗掘を恐れてか場所は明記していない。当然である。

写真集の副題に「1954 年から 50 年間の記録、神々が宿る島」とある。（下線は私が印した）。けだし、最適の副題であろう。

吉満義彦が生きたのは 1904 年から 1945 年である。

義彦少年が徳之島で過ごした少年期を仮に 14 年間とすると、加川氏が撮影した徳之島の風景をさらに 50 年から 36 年遡ることになる。その当時の徳之島の風景は、この写真集で見るとそれよりもさらに霊的な空間であり、アミにズムの世界であったであろうことは想像に難くない。義彦少年はかかる生命的地盤の中で本人の自覚無自覚に関わりなく、生命の奥底に「霊的感性」、「神秘的なものに対する感受性」を沈潜、堆積させていったものと私は推測する。加えて、義彦少年は、9 歳から 14 歳までの間に弟妹 4 人と、父母の死という受け入れ難い不条理に遭遇する。精神的平衡を維持するのにいかほど強靱な意志力を必要としたのだろうか。家族崩壊というこの不条理の受容と精神的平衡維持の耐力は神秘的ですらある。

以上、私は吉満義彦の、まさに肉体的生命を削り取っての形而上学的学究と思案の上に、尚且つ彼をしてカトリックの「霊性」「神秘性」を受容せしめた生命

的素地を、徳之島という「神々が宿る島」との関連において論じてきたが、もとより、吉満義彦のカトリシアンとしての「靈性」「神秘性」を汎神論的アミニズムの世界に落とす者ではない。吉満義彦が「靈性の優位」というとき、あるいは *Mystik* と表現するとき、それらは恐らく、カトリックにおける三位一体の「聖霊」を意味し、教会における「秘儀」をさしているのであろう。いずれにして、私の立ち入ることのできる領域ではない。それにも拘らず、吉満義彦という「孤高の」キリスト教哲学者がこの徳之島に誕生し、精神形成を行ったという事実に、同じ徳之島に生まれ育った者として、どうしても拘るのである。

私は当初、徳之島の歴史、自然、風土、島民性、といったことを考えたとき、それらの底流に、イメージ的にいえば、徳之島という島の地底深くを貫いて、何か太いマグマのようなものが蠢いているような感覚を持った。私はそれを「自制的ストイシズム」と直感した。要するに、徳之島の島民性は抑制的な禁欲主義なのである。黙々として潔く与えられた現状を自ら受け入れる。この「自制的ストイシズム」はしかし、そのマグマが臨界点に達すると、出口を求めて噴出する。この噴出を「ヒロイズム」と考えた。勿論、この場合のヒロイズムとは、いわゆる戦場における英雄的行為という意味のそれではない。己の確信した信念に徹頭徹尾殉ずるという点において英雄的という意味である。こう考えると、「母間騒動」における喜玖山以下 15 人の英雄的行為も、亀津断髪も、日本復帰運動における泉芳郎の命を賭けた闘争も、また、直近の例としては、米軍基地反対運動のあの熱烈な反対運動も、理解できるような気がしたからである。しかし、吉満義彦のあの英雄的な勉学の猛烈さや、実存的生は、この延長線上だけでは説明が困難である。躊躇はしたが徳之島の「マブイ」伝説と、「靈性」を導入した所以である。

先日、冒頭に記した若松英輔氏から「三田文学」三冊を頂いた。満を持しての、氏の「吉満義彦論」がこの「三田文学」に濃密に展開されている。この論文は、吉満義彦を徳之島との関連で論じた初めてのものである。吉満義彦にただならぬ関心を持っておられる若松英輔氏の今後のご活躍を心から期待する次第である。

※ 「シキヤツタ」

人が死ぬと三日目に霊との別れの儀式をする。この儀式のすんだ夕暮れに村はずれの三つ辻に行ってシキヤツタを放棄してくる。これをシキヤツタハンナギと言う。